

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Kinship : Kinship Terminology and Respect-Avoidance Behavior in Pulap, Central Carolines

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小松, 和彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003729

ポンナップ島の親族名称と表敬・忌避行動

小 松 和 彦*

- | | |
|---------------|------------|
| I. はじめに | IV. 親族名称 |
| II. ポンナップ島の概況 | V. 表敬・忌避行動 |
| III. 母系出自集団 | VI. まとめ |

I. は じ め に

ミクロネシアの中央カロリン諸島の小さな島々は母系出自原理によって社会集団を形成していることで知られている。しかしながら、これらの島々を親族名称の観点から眺め渡してみると、たとえば、本稿で紹介するポンナップ社会のようにクロウ型親族名称を用いる社会と、このポンナップに比較的近いサタウル島やトラック本島のようにはワイ型親族名称を用いる社会があることに気づく [須藤 1980; GOODENOUGH 1966]。これらの島々の生態学的自然環境はよく似ているのであるが、人間が社会生活を営む上で基礎となる社会集団が異なった原理（親族名称）で編成されているということは、当然人びとの行動様式や思考様式やその他の文化的産物に反映されてもしかるべきだと考えられる [SPOEHR 1949]。

だが、この点に関してまだわれわれは十分な検討を加えるまでには至っていない。われわれは、ハワイ型からクロウ型への歴史的変化や、その逆のクロウ型からハワイ型への変化などを推定しうるわけであるが、まだ個々の調査地の親族名称の変化についての推測の域を出ているとはいえない。たとえば、ポンナップやトラック本島のフェファン島（秋島）およびポンナップに近いポロワット環礁などの親族名称とその変化についての簡単な私自身の調査によれば、クロウ型からハワイ型へと変化したようにも思えるのだが、これまたまだ印象に基づくものでしかない。むしろ、須藤健一 [1980] がサタウル島の親族名称と忌避行動との関連についての報告を行なったような、個々の島々の親族名称とその機能についての研究を丹念に積み上げ、十分な調査

* 大阪大学文学部

資料が出揃ったところで、それらの比較研究を試み、その歴史的变化についての仮説を立てることが必要だということを痛切に感じる。

そこで、本稿では、ポンナップの親族名称とそれが重要な役割を果たしている母系クラン間の表敬・忌避行動について記述することにする。すなわち、この論文の目的は、一つには、これから積み重ねていくことになるポンナップの文化に関する研究の基礎的情報を提供すること、いま一つは、上述のような親族名称についての問題を解くための資料をつくること、そしてもう一つは、その機能の一つとして表敬・忌避行動を紹介することにある。

Ⅱ. ポンナップ島の概況

ポンナップ環礁 (Pulap Atoll) は、トラック環礁の西方約160マイル、北緯7度33分、東経149度25分に位置する小さな美しいサンゴ礁島である。ポンナップ環礁の南西約20マイルの洋上にポロワット環礁、北方約60マイルの位置にナモヌイト環礁がある。ポンナップ環礁は、ポンナップ、タマタム、ファナチックの三つのサンゴ礁島からなり、このうちファナチック島は無人島でポンナップの首長クランが所有している。私が調査のために滞在したのは、三つの島のなかでもっとも大きなポンナップ島で、人口およそ500人、面積は0.262平方マイルである。

気候、環境、植物相、基本的な文化様式のいずれも、熱帯太平洋の島々とほとんど変わらない [ALKIRE 1977]。一世代に一度か二度くらいの割合で破壊的な台風に襲われることを除けば、シャワーと呼ばれる一時的な降雨と蒸し暑い晴れの繰り返しの毎日が続き、10月から3月までの間は、快い北東貿易風のために多少しのぎやすい。

ポンナップの人びとは伝統的な食物と船で運ばれて来る輸入食品との混合した食事をとっている。伝統的な主食はタロイモとパンの実であり、その他に海からモーターボートや伝統的なカヌーでとってきた鮮魚、貝、ココナッツ、そしてときどき豚やニワトリ、犬、亀、野鳥などを食べている。また、バナナやパパイアなども食べるが、あくまで副食である。店で買う食品は米で、アメリカ政府からの援助米が定期的に入ってくることもあって、パンの実、タロイモと並んで、いまやポンナップ島民の主食の一つになりつつある。このほかにビスケット、カンヅめの魚やコーンビーフ、インスタントラーメン、塩、砂糖、コーヒー、紅茶、料理用油、ショウ油などを店から購入する。

また、タバコ好きのポンナップ人は、タバコをたいへん価値のあるものとみなして

おり、小学校教師などの少数の公務員を除く島民の主要な現金収入源であるコブラの代金の大半はタバコを購入するのに使われる。タバコは葬式や祝宴などのさいになされる儀礼的交換物のなかでも重要なものの一つとなっている。衣服は男はふんどし、女は腰巻だけである。布はもっとも価値のあるものとされ、儀礼的交換物の中心的位置を占めている。住居は、パンの木やヤシの木で骨格をつくり、パンの木の葉やヤシの葉を編んだ屋根や風よけを付けるといった極めて簡単な伝統的な家がまだ多いが、台風などの被害を受けやすいので、最近では木造の日本風あるいはコンクリート作りの洋風の住居も増えつつある。主食のタロイモの栽培に従事するのは女たちであり、男たちはもっぱら魚とりとカヌー作りや家作りなどの仕事に従事する。ヤシ酒の製造が許されているので、男たちによるヤシ酒作りが盛んに行なわれ、午後になるとあちこちで親しい者たちが何人か集って酒盛りが始まる。かつて女たちもヤシ酒を飲むことを許されたことがあったが、トラブルが多いため、現在は女たちが酒を飲むことはできない。

ポンナップの伝説によれば、この島は遠い昔には神々が住んでいた聖なる島であったとされており、とくにパリュラップ (*Ppaliw-lap*) とワリエン (*Weriyeng*) と呼ばれる神々が前後して居を構えていたという [小松 1985]。実際、第二次大戦後に全島をあげてキリスト教に改宗するまで、島の東側の海岸近くに、ワリエン神を祭った神殿が設けられており、ポンナップ人のみでなく、近隣の島々の航海者たちからも厚い信仰を受けていた。ポンナップという名前の意味については、いくつかの説があるが、ある説によれば、“偉大なる船長”という意味であるという。すなわちポンナップ人はカロリン諸島の航海者たちの信仰するワリエン神やパリュラップ神から直接的に航海術を教授された最も優秀な航海者たちであり、それにちなんで島名もポンナップと名付けられたわけである [小松 1985]。

Ⅲ. 母系出自集団

ミクロネシア、とくにカロリン諸島の出自原理は母系出自が一般的であるが、ポンナップの親族集団もまた母系を強調することによって形成されている。ポンナップ人はアイナン (*yáynáng*) と呼ばれる母系出自集団に生まれおちる。アイナンという語で指示される母系出自集団は、クラン、サブ・クラン、ローカル・クラン、リネッジの4つの人類学用語によって区別することができる。

クランは、共通の名前を有する人びとのカテゴリーで、母系出自原理によって、個

人は彼の母のクランに属する。ポンナップには6つのクランが存在している。それぞれのクランのメンバーたちは、ポンナップにのみ限定されているわけではなく、他の島々にも同じクラン名をもつ人びとが住んでいる。クランは第一に外婚の単位であって、同じ名前をもった人びとは互いに弱い親族意識を持っている。つまり母系的に継続されるクランのみが血のつながりを示す指標となっているわけである。このレベルの母系出自集団は、厳密な意味での“集団”，つまり組織を構成しているわけではない。ポンナップのそれぞれのクランのメンバーたちは、自分と同じクランのメンバーたちがカロリン諸島やミクロネシアのどの島々に住んでいるのかを正しく知らない。このため、ポンナップの人びとは、彼が初めて訪問する島に、自分たちと同じクランのメンバーが住んでいるかどうかを予め知ることができないわけである。

クランの重要な機能は、婚姻規制を除くと、他島から同じクランのメンバーが来訪したときに、彼らを歓待するということにある。来訪者はその島に同じクラン・メンバーがいると、彼らの保護を受ける。

サブ・クランは、正確に系譜をたどることはできないが、同一の祖先から分かれたという明確な伝承を共有しているクラン・メンバーたちの集団で、メンバーたちは多くの島々に分散しているが、クランの範囲よりも狭い集団である。彼らの結びつきは強く、社会的交渉をもつ機会も多い。たとえば、ポンナップの6つのクランの1つであるプール・クラン (Pwéél clan) は、19世紀後半にポンナップを襲った大型台風によって打撃を受けた後、しばらくの間、トラックのオレ (Woney) 島に移住した。彼らはやがてポンナップに再び戻ったが、一人の娘がオレの男と結婚して、オレに残り、その地にプールの子孫を増やした。そこで、現在でも、プールのメンバーたちがトラックを訪問するときは、オレのプールの人びとの保護を受け、また逆にオレのプールの人びとがポンナップを訪れたときには、ポンナップのプールの人びとの保護を受ける。

これまでそうしたサブ・クランのメンバーをもたなかった島に、ポンナップの女が結婚して移り住んだとき、そこに新たなサブ・クランが形成されることになる。サブ・クランは他島との間の友好関係もしくは交易を維持するための最も重要な社会的単位であるが、いくつかの島に分散しているために、以下で述べるローカル・クランやリネッジに見い出されるような、自律的集団を形成していない。

ローカル・クランは、ポンナップに住むクラン・メンバーから形成された最大の自律的母系出自集団で、そのメンバーたちは強い集団意識で結ばれている。ローカル・クランのメンバー間の結びつきは、日常生活、経済、政治、教育、宗教などのあらゆる側面にわたっている。ローカル・クランは、サブ・クランには欠けていた集団とし

ての統一性とはっきりしたリーダーシップをもった男性の長老の存在によって特徴づけられている。彼はハモナン・アイナン (*hamwol-en-yáináng*) つまりアイナンの長というタイトルをもち、彼の属するローカル・クランの政治的・社会的指導者である。彼の提案・決定は彼のローカル・クランのメンバーに対して絶対的であり、メンバーたちはそれに背くことはできない。ローカル・クランにおける地位の上下関係は、年齢・性別によって厳しく秩序化されている。すなわち、女性に対する男性の、年少者に対する年長者の優位性が厳しく確立されており、その優位性はアップロ (*yóppwóro*) と呼ばれる表敬もしくは忌避行動によって示されている。

ポンナップにある6つのローカル・クランは、ある程度のランクづけがなされており、最上位のローカル・クランの長がこの島の首長でもある。首長は島内のすべての事柄の最終的責任者であり、彼の決定に全島民が従わねばならない。彼は島の根源的な所有者であると考えられているので、パンの実やタロイモの収穫期には、彼はその最初の収穫物を島民たちから受け取る。

リネッジはローカル・クランの下位集団ともいうべき集団で、2つもしくはそれ以上のリネッジが集まってローカル・クランが構成される。つまり、リネッジはローカル・クランが人口増加のためなどで分枝するか、他島から異なった系統であるが同じクラン名をもつ女性が婚入してきて子孫を作ったときに形成される。リネッジのメンバーは互いにはっきりとした系譜関係をもち、リネッジ・リーダーとしての最長老の指導のもとに自律集団を形成しているが、リネッジのレベルで対処できないことがあれば、他のリネッジと共同してローカル・クランとしてそれに対処する。ポンナップで私たちが観察する集団は、これら4つのレベルのうちのローカル・クランもしくはリネッジのレベルの母系集団である。

このようにアイナンという語はポンナップにおいては4つのレベルに区別して記述しうるわけであるが、これまでに述べたことから明らかなように、日常生活において重要な役割を占めているのはローカル・クランもしくはリネッジの意味でのアイナンである。ポンナップに生まれた個人は、彼のローカル・クランのメンバーたちに育てられ、教育され、一人前の人間になる。やがて年長者になると、こんどは年少者たちを育て、教育し、長生きすれば、ローカル・クランやリネッジのリーダーとなる可能性もあるわけである。

ポンナップの親族体系は、このように母系出自集団を基礎として構成され、これが島における社会組織の基本集団ともなるわけであるが、いま一つ重要な社会単位としての家族についても述べておく必要がある。ポンナップの結婚後の居住形式は妻方居

住であるので、結婚後、夫は妻の住む土地に移動する。最近では、日常生活は核家族化しているが、伝統的な家族生活は、同じリネッジのメンバーたちを中心にした母系的大家族であった。すなわち、妻方居住の結果、リネッジメンバーのうち男性メンバーは婚出して妻のリネッジの土地に移動し、逆に女性メンバーの夫は妻のリネッジの土地に婚入して来る。つまり、結婚した男たちは妻のリネッジ・メンバーたちと共に生活することになるわけである。このような観点から眺めると、実際の日常生活は、同じリネッジに属する女性メンバーとその夫および未婚の男性リネッジ・メンバーからなる社会集団が存在していることになる。ここでは本来の男性のリネッジ・メンバーを第1次的メンバー、婚入してきた男たちを第2次的メンバーと呼ぶことにする。つまり、女性と異なり、ポンナップの男たちの属するアイナンは、結婚後は、2つあることになるわけである。こうした結婚した男の母系出自集団への二重帰属性は、彼の子供たちと彼の母系出自集団との強い結びつきとして表わされる。すなわち、後に述べるように、彼の子供たちは、彼らの母の出自集団に帰属するとともに、彼らの父の母系出自集団の準メンバーとみなされ、彼らと父の母系出自集団との間に特別な権利と義務の関係が設けられている。こうした母系出自集団の男性メンバーの子供たちを、アフアクル (*yáfakúr*) と呼ぶ。ポンナップの男たちの親族集団における位置というものは、このようにきわめて両義的でかつ媒介者的である。

IV. 親 族 名 称

ポンナップの親族名称は関係名称のみであり、相手に直接呼びかけるときには、つねに個人名が用いられる。ポンナップの親族名称体系は、(1) 世代、(2) 性差、(3) アイナン、に基づいて構成されている。親族を分類する重要な用語は、“ハム (*ham-*)”「チチ」，“イン (*yin-*)”「ハハ」，“プウイ (*pwi-*)”「キョウダイ (男性が話者のとき)」および「シマイ (女性が話者のとき)」，“ハキ (*haki-*)”「シマイ (男性が話者のとき)」，“ムウエンガイ (*mwéngéy-*)”「キョウダイ (女性が話者のとき)」，“ネイ (*náiyiy-*)”「コ」の6つである。この6つの用語を順に簡単に説明しよう (略号は F=チチ, M=ハハ, B=キョウダイ, Z=シマイ, S=ムスコ, D=ムスメ, C=コ)。最初に、血族をとりあげる。

① “ヘメイ (*hámáy*)”「私のチチ」——この語は、話者が男女いずれであっても、世代に関係なくエゴの父のクランのメンバーのすべての男性に対して用いられる (たとえば, F, FB, FMB, FZS)。また、エゴの世代より上の世代の女性のクラン・メンバ

一のすべての夫たちにも適用される。

② “イネイ (*yínáy*)” 「私のハハ」——この語は話者が男女いずれであっても、世代に関係なく、エゴの父のクラン・メンバーのすべての女性に適用される（たとえば FZ, FM, FZD, FMM）。また、エゴのクラン・メンバーのうち、エゴの世代より上の世代の女性メンバーのすべてに適用される（たとえば M, MM, MZ, MMZ, MMM, MMMZ）。

③ “プウィ (*pwíiy*)” 「私のキョウダイ」又は「私のシマイ」——話者が男性の場合、エゴのクランの男性メンバーは世代に関係なくすべてこの語が用いられる（たとえば, B, MB, MMB, ZS, MZS）。また、父のクランのすべての男性メンバーのムスコたちにも適用される（たとえば, FBS, FMBS, FZSS）。話者が女性の場合、エゴと同世代の女性のクラン・メンバーに用いられる（たとえば, Z, MZD, MMZDD）。また、父のクランの男性メンバーのムスメたちに世代に関係なく用いられる（たとえば, FBD, FMBD, FZSD）。

④ “ハキ (*hákíy*)” 「私のシマイ」——この語は男性が話者である場合に用いられる用語で、エゴと同世代および下の世代の女性のクラン・メンバーに用いられる（たとえば, Z, MZD, MMZDD, ZD, MZDD）。また、彼の父の男性クラン・メンバーの女の子供たちに関係なく用いられる（たとえば, FBD, FMBD, FZSS）。

⑤ “ムウェンガイ (*mwéngéyáy*)” 「私のキョウダイ」——この語は女性が話者である場合に用いられる用語で、エゴと同世代および上の世代の男性のクラン・メンバーに用いられる（たとえば, B, MB, MMB, MZS, MMZS）。また父のクラン・メンバーのムスコたちに世代に関係なく用いる（たとえば, FBS, FMBS, FZSS）。

⑥ “ネイ (*náyíy*)” 「私のコ」——話者が男性の場合、彼の子供とその子供、彼のクランの男性メンバーの子供とその子供に適用される（たとえば, C, CC, BC, MBC, MBCC）。また、彼の父のクランの男性メンバーの子供の子供たちにも適用される（たとえば, FBCC, FMBCC）。話者が女性の場合、彼女の下世代のすべてのクラン・メンバーに適用される（たとえば, C, ZC, DC）。また、彼女の父のクランの男性メンバーたちの子供の子供たちすべてにも用いられる（たとえば FBCC, FMBCC, FZSCC）。

これを図で示してみよう。図1はエゴが男性である場合の、エゴのクランのメンバーの親族名称、図2は、エゴの父のクランのメンバーについてのエゴからみた親族名称である。

この図からも明らかなように、男性エゴにとって、自分の「チチ」は自分のクラン

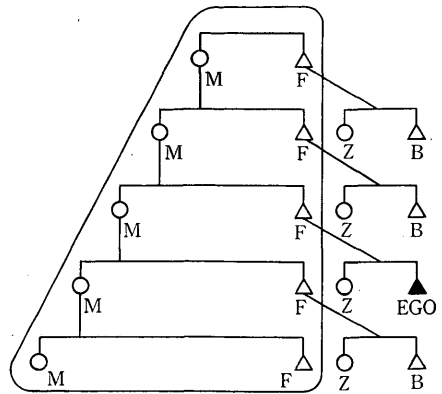


図2 エゴ(男性)の父のクランの成員の親族名称

には存在せず、また自分の「コ」もまた自分のクランには存在していない。自分のクラン・メンバーたちは「キョウダイ」もしくは「シマイ」と「ハハ」だけである。図3と図4は、エゴが女性の場合の図である。図2と図4を比較してみると、エゴが男性であれ女性であれ、エゴの父のクランのメンバーたちは、「チチ」と「ハハ」の二つの用語のみで表現されており、両者に用語上の違いはない。しかし、図1と図3を比較してみると明らかになるように、エゴのクランのメンバーについては、エゴが女性である場合とエゴが男性である場合とでは違いがみられる。すなわち、エゴが女性である場合、エゴのクラン・メンバーに対しては、「キョウダイ」、「シマイ」、「ハハ」、「コ」の4つの用語が用いられているのである。これは、ボンナップの親族名称体系においては、「ハハ」と「コ」関係と「キョウダイシマイ」関係を取りわけ強く意識し、厳しく用語の上で区別しているからである。

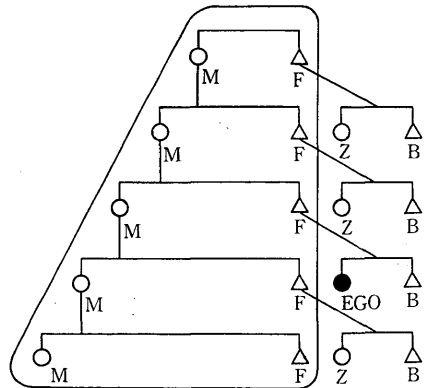


図4 エゴ（女性）の父のクランの成員の親族名称

ところで、図3において示されるように、エゴが女性である場合、彼女の「コ」は彼女のクランの内部に存在しているとともに外部にも存在している。これらのクラン内部の「コ」とクラン外部の「コ」の間には明確な区別がなされており、エゴのクランの外側にいる「コ」たち、つまりエゴのクランの男性メンバーの“子供たち”をエゴおよびエゴのクランのメンバーたちは、「自分たちのクランの“コ”」と呼ぶ。さらにこうした「自分たちのクランのコたち」に対して、すでに述べたようにアフアクルという親族用語を用いる。したがって、アフアクルたちは、彼の父のクランの子供たち同士という意味での「キョウダイシマイ」の関係になるわけである。「アフアクル」同士の結婚およびアフアクルと彼のアフアクルの子供との結婚は禁止されている。したがって、ポンナップでは交叉イトコ婚は存在しない。

グッドイナフは、トラック諸島のロモヌムにおけるアフエキル (*yefekyr*) を「相続人」と訳したが [GOODENOUGH 1966], ポンナップにおけるアフアクルについてもこの訳語がふさわしい。ポンナップの習慣によれば、新しい夫婦は、結婚に際して、それぞれの両親から土地を分与され、その双方を合せた土地が彼らの土地になる。すなわち、子供たちは息子であろうと娘であろうと、彼らの母のクランからだけでなく、父のクランからも土地を相続する。ポンナップの伝統的な土地所有の体系は、最終的な土地所有権は島の首長にあるが、実際には彼からそれぞれのアイナンに永久的に貸与された形式をとっており、したがってアイナンの土地はそのアイナンのメンバーたちによって管理されている。そしてその土地はアイナンを構成するメンバーたちにさらに分割して貸与されているわけである。アイナンのメンバーたちがそれぞれ任された土地は、彼らが耕作したり、管理しなければならず、また彼らの子供が結婚する際には、その子供が女であろうと男であろうと彼らの土地を分与しなければならない。このような体系をとっているために、アイナンの土地は、女のメンバーが多ければ多いほど増加し、男のメンバーが多いと減少することになる。新夫婦は、それぞれの両親から土地を分与されるが、夫の父から与えられた土地の真の相続者は彼らの子供たちであり、妻ではない。彼らに子供が生まれなければ、彼らの土地は、彼らの死後、もとの所有者、つまり夫の父のクランに取り戻されてしまう。彼らに子供ができたとき、はじめてその土地は相続されたことになるのである。アイナンに男の子供が多く生まれれば、その男を通じてアイナンの土地は流出し、女が多く生まれれば、その女を通じてアイナンの土地は増加するわけである。あるアイナンに男の子供のみしか生まれなければ、アイナンの土地はすべてその男を通じて別のアイナンに流出し、その男たちが亡くなるとともに、アイナンおよびその土地の双方が消滅することになる。この

ようにアフアクルつまりクランの男性メンバーの子供は、父のアイナンの土地の相続者であるがゆえに、父のアイナンに対してさまざまな義務を果たさなければならず、もしそうした義務を怠ると、父のアイナンから分与された土地を取り上げられてしまうこともある。アイナンは、そのアフアクルに対してそうした権利を有しているのである。

さて、これまでは、ポンナップの親族名称のうち、血族について紹介してきたわけであるが、次に姻族についても簡単に言及しておかねばならない。姻族を表わすポンナップ語は、オーヘイ (*yóóháy*) である。姻族は、①ある者の血族の配偶者、②ある者の配偶者の血族、③ある者の配偶者の血族の配偶者、の3つのタイプに分けて検討することができる。これらの姻族に言及するために、ポンナップでは、血族を言及するために用いた語も用いられるが、新しい用語にも出会う。それは配偶者を意味するローニーム (*róónimw*-「私の配偶者」) という語である。この語は「人」を意味する「ロー(*róó-*)」と「家」を意味する「イーム (*-imw*)」との合成語で、男女いずれの配偶者にも用いられる。

まず、エゴの父のアイナンのメンバー、つまり「私のチチ」と「私のハハ」の配偶者の名称をみてみよう。彼らはそれぞれ「私のチチの配偶者」あるいは「私のハハの配偶者」として言及されることもあるが、「私のチチ」の妻は「私のハハ」として、「私のハハ」の夫は「私のチチ」として言及されることの方が多い。エゴのアイナンのメンバーのうち、「私のハハ」の夫は「私のチチ」として言及するのが一般的である。「私のキョウダイ」もしくは「シマイ」の配偶者について、男性が話者であるときと、女性が話者であるときに区別して述べる必要がある。男性が話者のときの「キョウダイ」の妻は「私のキョウダイの配偶者」として言及するが、彼女が年下の「キョウダイ」の妻の場合では「私の配偶者」と表現することもある。これはかつて彼女がエゴの潜在的な性的パートナーでもあったからである。「シマイ」の夫は、「私のシマイの配偶者」となる。これに対して女性が話者であるとき、「キョウダイ」の夫は「私のキョウダイの配偶者」となる。「私のコ」の配偶者については、「私のコの配偶者」もしくは「私のコ」が用いられる。

②のタイプの姻族は、おおむね、夫もしくは妻が言及する名称に一致する。たとえば、妻の「チチ」は「私のチチ」、妻の「ハハ」は「私のハハ」、夫の「チチ」は「私のチチ」、夫の「ハハ」は「私のハハ」となる。配偶者の「キョウダイシマイ」については、たとえば、妻の「キョウダイ」を「私の配偶者のキョウダイ」として言及したり、妻の「シマイ」を「私のシマイ」あるいはかつては場合によって性的パートナ

一となることもあったので「私の配偶者」として言及したりする。おおむねこうした表現がなされるわけであるが、妻の血族に対して注目すべき用語が用いられることがある。すなわち、エゴが男の場合、世代に関係なく、彼の妻のリネージの男のメンバーたちを「私のコ」と呼ぶことがあり、逆にエゴのリネージの女のメンバーの夫を「私のチチ」と呼ぶことがある。これは、エゴ（男性）の子供と妻のリネージの男性メンバーとが「キョウダイシマイ」の関係にあることによっている。

③のタイプの姻族についてもほぼ上述と同様の言及のされ方がなされる。たとえば、エゴ（男性）の妻の「チチ」の配偶者は「私のハハ」もしくは「私の配偶者のチチの配偶者」となり、夫の「キョウダイ」の妻は「私の配偶者のキョウダイの配偶者」として言及される。

V. 表敬・忌避行動

さて、これまでポンナップの親族名称をかなり詳しくみてきたわけだが、以下では、こうした親族名称がどのような機能をもっているのかを、人びとの行動を厳しく規制しているアップロとよばれる行動のしくみをみることで検討してみたい。

この島を訪れた外国人は、上陸してから何日か経つと、島民の奇妙な行動に目を止めることになる。たとえば、ある女が、男の姿を見ると、その男を避けるかのように腰に両手を回し、背をかがめて、その男の視界から身を隠そうとする光景を目撃したり、座っている男に女が四つんばいになり、はって近づいているといった光景を目にするはずである。これは、こうした行動を見慣れない外国人には奇妙にみえるが、実はその女がきまった男に対してアップロをしているところなのである。

アップロとは、個人が特定の親族員の前で相手よりも低い姿勢をとらねばならないという規制のことである。この語意は“腰をかがめること”であって、これはそうした低い姿勢が具体的には、腰をかがめる行為で示されることに基づいている。アップロは一種の“礼儀作法”であるといえる。すなわち個人が自分よりも優位の立場にある親族、つまり日本的な表現を使うと「目上の人」にあたる親族に対して敬意を示す行為として理解することができる。しかもこの表敬行為はたんに自分より優位の立場にある親族員の前で低い姿勢をとるだけでなく、可能な限り、両者の物理的接近を差し控えるという形をとるので、忌避行動としても記述することができるわけである。現在のこうした表敬・忌避行動は、1950年代の前半頃にいったん廃止されたが、ミクロネシア議会においてミクロネシアの伝統文化を守ろうという決議が採択された1960

年代の後半頃再び復活したものである。このため、廃止以前のものと比べるとかなり崩れているという。しかし、あるインフォーマントによれば、北西離島の中でもボンナップがもっとも厳しくこの習慣を復活して以後守っているという。

それでは、ボンナップの伝統的なアップロはどのような人々に対してなされるのであろうか。つまり、そうした表敬行動を受ける親族員はどのような親族名称で述べられる人であらうか。また、アップロは親族関係においてどのような機能をもっているのだらうか。以下で、この疑問を解いていくことにする。

アップロは、「キョウダイシマイ」関係にある人びとの間でなされる表敬・忌避行動で、クランを基準にして、(A) 同じクランに属する「キョウダイシマイ」間と(B) 異なったクランに属する「キョウダイシマイ」間、つまりアフェクル間、におけるものに区別することができる。また、(A)、(B) のそれぞれはさらに性別を基準にして、(1) 同性の「キョウダイシマイ」間と(2) 異なった性の「キョウダイシマイ」間におけるアップロに区別することができる。さらに、同性の「キョウダイシマイ」間のアップロは、「キョウダイ」間と「シマイ」間に区別しうる。順を追って、これらのそれぞれの形態において、エゴがどのような人にアップロをせねばならないかを見てみよう。

最初は、(A)―(1)の形態である。このタイプには、上述したように、「キョウダイ」間、「シマイ」間の二つの下位のタイプがみられる。最初に、「キョウダイ」間のアップロを図を用いながら説明しよう。図5は、エゴのリネージュを示している(数字は一人の女から生まれた出生順位を表わしている)。エゴはこのリネージュの男性メンバーたちのだれとだれにアップロを行ない、だれとだれにアップロをされるのであろうか。

アップロをするしないは、世代と出生順位によって決定される。したがって、エゴの本当の母Hから生まれたN, エゴ, Oの三人の「キョウダイ」の間においては、エ

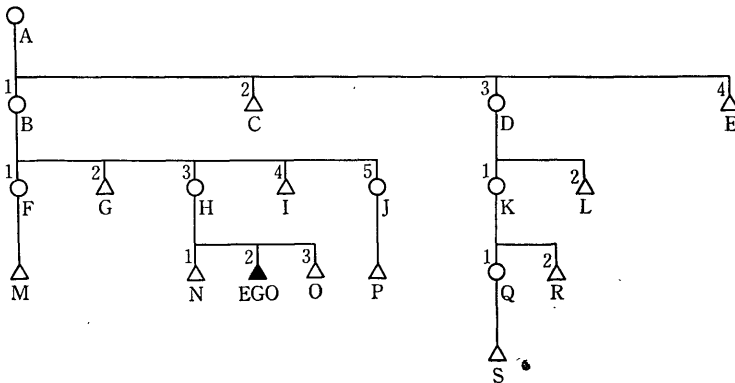


図5 エゴ(男)のクランにおける出生の順位

ゴよりもNの方が年上なので、エゴはNに対してアップパロをしなければならない。これに対して、エゴより年下のOはエゴに対してアップパロをしなければならない。エゴと同世代のM, P, Rに対してはどうであろうか。たとえMがエゴより年下であろうとも、エゴはMに対してアップパロをしなければならず、またPはたとえエゴよりも年上であろうとエゴにアップパロをせねばならない。なぜならば、Mの母Fとエゴの母HとPの母Jとは、彼女たちの本当の母Bから生まれた姉妹の関係にあり、F, H, Jの順に生まれたからである。つまり、エゴは、エゴの母HよりもMの母Fの方が年上であるがために、Mに対してアップパロをせねばならないのである。同様に、エゴは、エゴの母HよりもPの母Jの方が年下なので、Pからアップパロをされることになる。Rについてはどうであろうか。Rについても同じ原理を適用することができる。エゴの母の母BとRの母の母Dは、女性Aから生まれた本当の姉妹であって、Bの方がDよりも年上であるので、エゴはRに対して年齢に関係なくアップパロをする必要はなく、逆にRからアップパロの礼を受けることになる。すなわち、同世代の「キョウダイ」間のアップパロは、彼らの年齢に関係なく、世代をさかのぼって、一人の女性から生まれた順位によって決定されるわけである。エゴより上の世代のリネッジのメンバーに対しては、どうであろうか。エゴは自分よりも上の世代の男性のリネッジ・メンバーのすべてにアップパロをせねばならない。

以上の説明から、次のようなことが明らかになるはずである。すなわち、このリネッジの男性メンバーのなかで、だれにもアップパロをしなくてもよい男が一人おり、その男つまりCがこのリネッジの「長」の位置に立っている。そして彼を頂点にして、アップパロをすべき人が少ない順に、男性メンバーたちはランクづけられ、そしてこのランキングの一番下に全ての男性メンバーに対してアップパロをしなければならない男Sが位置づけられることになるのである。つまり、このリネッジではC→E→G→I→L→M→N→エゴ→O→P→R→Sという順位が決定しており、Cが亡くなると、Eがリネッジの「長」の地位につき、EがなくなるとGがその地位を得るわけである。このようなランキングのシステムにおいては、年齢の上下はあまり関係ない。たとえRがエゴやOやPよりもどんなに年を取っていても、彼はエゴやOやPよりも先にリネッジの「長」になることはできない。したがって、さきにポンナップのアイナンは、長老たちに指導され、その最長老がリネッジの「長 (*hamwonl-en-yáynáng*)」であると述べたが、厳密には以上のような世代と出生順位によるランキング・システムにしたがってリネッジの「長」が選ばれているのであって、必ずしも年齢が一番上である長老というわけではないのだ。

次に「シマイ」間のアップパロを説明しよう。「シマイ」間のアップパロも原理的には男性の場合と同様であるが、女性であるエゴの属するリネッジ・メンバーのうち、エゴと「シマイ」関係にあるのは、彼女と同世代の女性メンバーに限られている。上の世代の女性メンバーはすべて彼女の「ハハ」であり、下の世代の女性メンバーはすべて彼女の「ムスメ」である。したがって、「シマイ」間のアップパロは同世代の「シマイ」間に限定されている。図6は、エゴが女性のときのリネッジの女性メンバーたちの図で、エゴの世代のランキングは、 $H \rightarrow I \rightarrow \text{エゴ} \rightarrow J \rightarrow K \rightarrow L \rightarrow M$ の順になる。すなわちエゴはIとHにたいしてアップパロをしなければならないわけである。なぜならば、女性Iはエゴの年上の本当の姉であり、女性Hの母は、エゴの母の本当の姉であるからである。また、女性のエゴの一つ上の世代のランキングは $D \rightarrow E \rightarrow F \rightarrow G$ であり、二つ上の世代のランキングは $B \rightarrow C$ である。

このような同世代のリネッジの女性のメンバー間のランキングは、女性のエゴの属するリネッジにおける男性の「長」の地位に対応する女性メンバーたちの女性の「長 (*fine-hamwol-en-yáyináng*)」の地位継承順位を、男性における「長」の地位の場合と同様、つね日頃から女性メンバーたちに広く周知させておくという効果をもっている。すなわち女性の「長」Bが死んだら、その地位はCに移り、Cが死んだら、下の世代のDに移っていくことを、女性メンバーはアップパロを通じて了解しているわけである。たとえば、MはLよりもどんなに年上であろうとも、Mが生存中には「長」の地位につくことはできないのである。

このように、男性の場合であれ、女性の場合であれ、同性の「キョウダイシマイ」間のアップパロは、「キョウダイシマイ」間にランキングを作り出し、かつそのランキングをアップパロという表敬行動を通じて日頃から周知させておくという重要な効果を

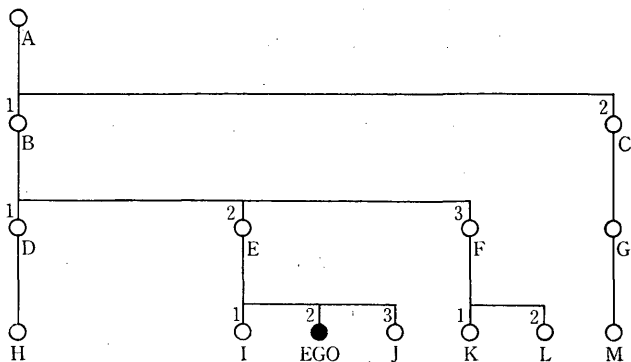


図6 エゴ（女性）のクランにおける出生の順位（男性メンバーを除く）

もっている。エゴがアップロをしなければならない「キョウダイシマイ」のエゴに対する権威は強力なもので、劣位にある「キョウダイシマイ」は優位にある「キョウダイシマイ」の命令や彼らの決めた規則に絶対的に服従しなければならない。それを破ることは、リネッジのメンバーとしての資格を失なうことであり、昔は事実上“死”を意味していたのであった。まさしく、アップロとは、自分よりも優位なメンバーに対して「尊敬するがゆえに遠ざかる」ことを示す表敬・忌避行動なのである。

ところが、(A)―(2)の場合、つまり異性間のアップロは、同性の「キョウダイ」および「シマイ」間のアップロとは大分性格が異なっているように思われる。それは、敬意に満ちた忌避行動であるとともに性的忌避行動をも意味している。

ポンナップの人びとの考えによれば、女は男よりも劣った人間であるとされている。大人の女性を表すポンナップ語ロープット (*róópwut*) は、「動物」や「人」を意味するロー (*róó*) と「汚れた」「悪い」「望ましくない」を意味するプット (*pwut*) という語の合成語である。これは、女性の月経の血を不浄とみるところからきている。月経の血は不作や嵐を招くと考えられており、キリスト教に改宗する以前は、月経になった女は、月経小屋 (*imwopwut* 「汚れた家」 = *imw* 「家」 + *pwut* 「汚れた」) に隔離された。男と女の優一劣の対立は、ポンナップ社会のさまざまな面に示されており、たとえば右手のことを“男性の手 (*pawún mwáán*)”と表現したり、“善なる手 (*pawú fir*)”と表現したりするのにに対して、左手は“女性の手 (*pawún róópwut*)”とか“悪い手 (*pawú ngawa*)”として表現される。すなわち、女性が子供を生み、母―子関係を基準にして親族集団が形成されているにもかかわらず、女性は社会的に男よりも劣った人間であるとされ、それゆえに、女は彼女のリネッジの「キョウダイ」のすべてに対してアップロをしなければならないのである。

しかしながら、同じリネッジに属する「キョウダイ」に対する「シマイ」のアップロは、「キョウダイ」に対する「シマイ」の尊敬の念に基づく忌避としてのみでなく、性的な忌避としての性格も強く現われている。すでに述べたように、アイナンは外婚単位であり、同じアイナンに属する者同士が性的関係をもつことは厳しく禁止されている。同じアイナンの異性の「キョウダイシマイ」間にみられる忌避行動はさまざまなかたちをとって示される。たとえば、異性の「キョウダイシマイ」は、同じ部屋で寝ることはできない。女は異性の「キョウダイ」の衣服などに触れてはならない。「キョウダイシマイ」が二人だけで話をしてはならない。女が「キョウダイ」の姿を見かけたら腰をかがめて歩かねばならない。また、どうしても異性「キョウダイ」に話しかけたり、品物を手渡さなければならないときは、その男が座っていたならば、

立ってもらって腰を屈め彼より頭を低くした姿勢で近づくか、さもなければ四つんばいになって近づかねばならない。そして、こうした異性の「キョウダイシマイ」間に課せられている禁止を破ったものは、周囲の人びとから、近親相姦つまりインセストを犯しているのではないかと、との疑いをかけられる。インセストを表わすボンナップ語マムモト・ンガウ (*mémot nngaw*) は「悪い配置」という意味であり、これは、夜に異性の「キョウダイシマイ」が同衾することをメタフォリカルに表現している。このように、異性のキョウダイ間のアップロには、こうした性的な忌避も込められているわけである。

次に、簡単に (B)―(1) の場合と (B)―(2) の場合のアップロに触れておこう。これらの場合のアップロもまた、(A)―(1)、(A)―(2) の場合にみられたアップロと同じ基準で優劣関係が定められ、それに基づいてアップロを行なう。(B)―(1) について言うと、アップロは同じ性のアフアクル間のランキングを作り出すと同時に、アップロを行なうことを通じてつね日頃から、アフアクルたちが互いにアフアクルとしての「キョウダイシマイ」関係にあることを確認しているという効果をもっている。(B)―(2) について言うと、女が彼女の異性のアフアクルに対して日頃からアップロを行なうことを通じて、単にアフアクルとしての「キョウダイシマイ」関係の確認のみならず、彼らの間にはインセスト・タブーが守られていることを周知させるという効果をもっているのである。つまり、性的忌避としての性格も含まれているわけである。

ボンナップ島民は、キリスト教に改宗するまでは、一人前の大人になるためのイニシエーション儀礼を受けたが、その時に大人たちから受ける教育・訓練の中に、こうしたアップロをすべき人びとを覚えるということが含まれていた。若者にとって、アップロをすべき人びとはかなりの数にのぼるが、しかしそうした人びとと自分との親族関係を正しく記憶していない限り、彼らは島の中で一人前の大人として動き回ることとはできなかったのである。こうしたボンナップの伝統的なアップロのシステムに比べると、現在のアップロのシステムは、かなり崩れたものになっている。厳しく守られているのは異性間のアップロであり、同性間のアップロは、座っている“長老”に立った姿勢で話しかけたり、“長老”のそばでは立った姿勢で別の仕事をしたりすることを控えるといった程度の表敬行動になってしまっている。

VI. ま と め

さて、これまでの記述を通じて、私はある程度までボンナップにおける親族名称と

アップパロ・システムとの間の密接な関係を提示しえたと考える。すなわち、アップパロが行なわれるのは「キョウダイシマイ」関係にある人びとの間である。「オヤ」―「コ」関係にある人びとの間ではアップパロは行なわれない。「キョウダイシマイ」関係にある人びとは厳密にランクづけられ、優位者の命令は絶対であり、アップパロで示される表敬・忌避行動によって厳しく規制されている。つまりアイナン内の政治（権威）的な秩序は「キョウダイシマイ」関係の上にうち立てられているのである。

これと対照的なのが「オヤ」と「コ」の関係である。そうした関係にある者たちは、肉体的な接触が許され、親しみをもってつきあうことができる。「コ」たちは「オヤ」たちに甘えることができ、「オヤ」の命令は絶対的なものではない。ときには冗談を交わし、無駄口をたたき、文句を言うことも許されている。「コ」は「オヤ」の所有物を勝手に使用することができ、また「オヤ」は「コ」を、そうした関係の中で養育したり教育したりし、一人前の大人に育て上げるのである。すなわち、「キョウダイシマイ」関係を支えているのは政治的権威と性的忌避であるのに対して、「オヤ」―「コ」関係を支えているのは愛情なのである。

グッドイナフ [GOODENOUGH 1966] が述べているように、ポンナップにみられるアップパロは、かつて、トラック本島でも行なわれていたものである。しかし、はるか昔に絶えてしまった。その結果、あるインフォーマントが語るように、“若者”が“長老”にたいする尊敬の念を失ない、トラックの社会秩序は混乱をきたしているのだという。また、トラックにおけるアップパロの消滅は、トラックの親族名称の変化と関係があるとされている。すなわち、トラックももとはポンナップと同様のクロウ型の親族名称をもつ社会であったが、いつの頃か定かではないが、エゴの属するクランのメンバーのうち、エゴより上の世代の男のメンバーたちを、「キョウダイ」としてではなく「チチ」として分類するようになったため、上の世代のメンバーとエゴの世代のメンバーとの関係が、ポンナップにおける“愛情”を中心とした「オヤ」―「コ」の関係に変化してしまい、それに伴って、「キョウダイ」間にみられた表敬・忌避行動が混乱したり、それをする必要がなくなって、アップパロが消え去ったのだという。

トラックの親族名称がクロウ型からハワイ型へと変化したという確実な証拠を私は持たないので、ここで提示することは控えるが、ここに注目すべき事例がある。ポンナップではかつてトラックに長期間滞在した男によって、ハワイ型の親族名称体系へ変更すべきであるという提案がなされたことがある。この提案は島民に支持されず、彼のリネッジのみがハワイ型に切り変えたが、いろいろと不都合が生じ、次第にそのリネッジでもハワイ型の親族名称は用いられなくなった。同様のことはポロワットで

も生じ、ここでは、3つある村のうちの1つで採用され、このためポロワットでは伝統的なクロウ型の親族名称を用いる人びとと、新しいハワイ型の親族名称を用いる人びととが共存しているという。

このような事例をみる限りでは、カロリン諸島のある地域では、クロウ型からハワイ型への移行がなされたのではないかと推測したくなる。そうだとすると、ではそもそもそうしたハワイ型にどうして変らねばならないのか、その原因を文化史などからも検討する必要がある、あくまで個別事例にとどまっている。したがって、当面の課題は、そうした仮説を述べるよりも、ハワイ型の親族名称とクロウ型の親族名称をもつカロリン諸島の島々におけるその構造—機能的側面の研究が深められ、そのようなタイプの親族名称をもつ社会での「オヤ」と「コ」の関係および「キョウダイ」の関係のあり方や表敬・忌避行動が、親族名称とどのように対応しているのかを明らかにすることであろう。そうしたデータが充分に出揃ったとき、カロリン諸島のハワイ型親族名称体系とクロウ型親族名称体系との比較が可能になり、両者の関係についての仮説も提出できるのである。親族名称の変化は、単なる名称上の問題に留まらず、社会関係・社会構造の変化を含む極めて重大な問題である。本稿では、ポンナップの人びとの見解を述べるに留め、充分なデータが集まった段階で、改めてこの問題を検討することにしたい。

謝 辞

ポンナップ島の調査は、文部省科学研究費補助金（海外学術調査）の交付を得て、1980年9月—1981年3月、1983年11月—1984年3月、1985年8月—11月、の三度行なった。本稿の資料は、主として第一回目の調査において採集したものである。なお、本稿はすでに英文で発表した報告[KOMATSU 1982]に加筆し、修正を加えたものである。

ミクロネシア調査においては、多くの現地の方々にお世話になった。とくにポンナップ島の前伝統的首長サラフィンと現首長ティトゥスおよび調査時の行政上の首長の方々には私の調査を許可してくれたことに対して、また保健夫であったセレスティン・ロコプエとその家族には私の宿舎の提供や調査助手としておしめない協力をしてくれたことに対して、心からの感謝の念を表したい。また、トラックの首島モエン島にあって協力して下さった三田忠二郎および末永卓幸の両氏にも感謝したい。

文 献

秋道智彌

1980 「海に生きる——サンゴ礁の島」『季刊民族学』13: 47-54。

ALKIRE, William H.

1977 *An Introduction to the Peoples and Cultures of Micronesia* (Second Edition). Menlo Park,

小松 ポンナップ島の親族名称と表敬・忌避行動

California: Commings Publishing Co.

ELBERT, Samuel H.

1972 *Puluwat Dictionary*. Pacific Linguistics C-24, Canberra: Australian National University.

GOODENOUGH, W. H.

1966 *Property, Kin, and Community on Truk*. Hamden, Connecticut: Archon Books.

石森秀三

1985 『危機のコスモロジー』 福武書店。

小松和彦 (KOMATSU, Kazuhiko)

1982 Kinship Terminology and Respect-Avoidance Behavior in Pulpap, Central Carolines. In M. Aoyagi (ed.) *Islanders and Their Outside World*, Tokyo: St. Paul's (Rikkyo) University, pp. 129-152.

1985 「聖なる島ポンナップの島名起源説話」 川田順造, 徳丸吉彦編『口頭伝承の比較研究』 2, 弘文堂, pp. 136-164。

1988 「ポンナップ島の首長制素描」 小川正恭, 渡邊欣雄, 小松和彦編『象徴と権力』 弘文堂, pp. 222-245。

MURDOCK, G. P. and W. H. GOODENOUGH

1947 Social Organization of Truk. *Southwestern Journal of Anthropology* 3: 331-343.

SPOEHR, A.

1949 The Generation Type Kinship System in the Marshall and Gilbert Islands. *Southwestern Journal of Anthropology* 5: 107-116.

須藤健一

1980 「母系社会における忌避行動」『国立民族学博物館研究報告』 5 (4): 1008-1046。

牛島 巖

1987 『ヤップ島の社会と交換』 弘文堂。